

【親鸞（中学）部門・文化時報社賞】

まわりの人と違うカタチ

札幌大谷中学校 第1学年 I.R

「あなたの大切なものは何ですか。」小学校の時も同じようなことを聞かれました。小学校の時の私のクラスでは二つの意見に分かれていてお金と家族でした。その時私はお金だと答えました。なぜお金を選んだのか。それは、私の家族は周りの家族とは少し違ったからです。私の家には父親がおらず唯一の兄弟である弟は、言語障がいを持っています。周りの家族とは違うことが二つも重なっている自分の家族をよく思うことが小学校低学年の私にはできませんでした。そのため友達に家族について聞かれても、いつも話をそらしていました。そして、結局誰にも自分の家族について言わずに高学年になってしばらくして、学校の授業で障がいがある人について学習する機会が設けられた。正直、みんな嫌がるのかなと思っていたのですが誰一人嫌な顔をしなかった。その光景にとっても衝撃を受け、もしかしたら私の家族のことを話しても受け入れてくれるかと思い、思いきって話してみると、自分が思っていたよりもすんなりと受け入れてくれて「障がいがある子ってどんな感じなの。」と興味を持って話しかけてくれた子もいました。自分が思っているよりもまわりの方は優しいのかもしれない。たった一つの出来事でそう思ってしまうほど嬉しい出来事でした。もちろん中には障害がある人が苦手だという人もいたけど、兄弟が障害があっても関係ないよ。と私は私として見てくれました。そして今年から中学生になった私に小学校の時と同じような質問で作文を書くという宿題が出た。小学生の頃は素直に自分の家族について言うことができずお金だと答えてしまった質問。今の私は、迷わず家族について書くことにした。障がいの子を理解してくれない人もいるけど自分が自分の家族を自慢に思っていてまわりの方も自然と理解してくれる。過去の経験から私はそう思っています。優しい家族は今の私にとって、何より大事な『宝物』です。